

S.R.ランガナタン

“New Education and School Library”

に見られる教育の概念と学校図書館観

吉植 庄栄（宮城教育大学附属図書館）

1. はじめに
2. 代表的著作に見られる教育の概念と学校図書館観：“New Education and School Library”以外の著作から
3. “New Education and School Library”の概要
4. 本書に見られるランガナタンの教育の概念と学校図書館観
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに¹

拙稿²で「図書館とは何か？」について、現時点での回答を導いた。

○図書館とはなにか？

収集・整理・保存している資料を利用に供し自己教育を促すことで教育の一形態を担う、人々を覚醒に向かわせる場所。資料は一覧的に陳列され、利用者は個人的サービス・支援を受ける事ができる。

これは、図書館とは教育の一つの形態であることをさらに強調したものである。S.R.ランガナタン（Shiyali Ramamlita Ranganathan, 1892-1972）の図書館観を読み解きこのような見解を出した訳であるが、ここからさらに彼の教育思想を検証し、この定義について深める必要性を筆者は感じている。そこでS.R.ランガナタンが残した教育に関する文献をさらに精査することとした³。

¹ 本稿は、平成 25 年 9 月 7 日に開催された第 46 回東北教育哲学教育史学会における発表「『学校図書館とは何か？』－S.R.Ranganathan を手がかりに－」を土台にして論文化したものである。

² 拙稿「『図書館とはなにか？』－S.R.Ranganathan を手がかりに－」『教育思想』40号, 2013, pp.37-54.

³ これまで教育の概念を巡って次のような成果をまとめてきた。
拙稿「『図書館と情報リテラシー－東北大学大学院教育学研究科人間形成論研究室で行った6年間の図書館講習会について－」『教育思想』38号, 2011, pp.45-56.
同「S.R.ランガナタン『図書館学の五法則』に見られる教育の概念－図書館を人間形

教育をテーマとする著作のうち、教育の概念がダイレクトに現れる「学校図書館」についてのものを今回は考える。これについては筆者の置かれた昨今の状況にも大きな関係があるので、その点も説明しておくことにする。

私事ながら筆者は現在の職場である宮城教育大学で司書教諭科目の講師を担当する機会を得た。これまで大学図書館で長く働いてきた経験を生かして講義に臨んだのであるが、教員養成系大学での学校図書館に関する科目で教授する内容は、これまでの経験とは全く異なる要素や分野に遭遇することにもなった。遭遇したものの一例を挙げると、学校現場で行われている調べ学習の場所としての学校図書館について、その要素を意識した内容に触れたり、実習を行ったりすることである。

同時に、研究を続けてきたランガナタンの著作“New Education and School Library”を入手することができた。この図書は筆者が、国立大学図書館協会の平成24年度海外派遣事業によるインド訪問で、手に入れたものである。当該書は、我が国には京都教育大学附属図書館と立教大学図書館のみに所蔵されており、訳本も存在しない。

以上の背景から本稿では、当該書の内容を要約的に紹介した後、その中のランガナタンの教育の概念の検証と学校図書館観の考察を行う。

2. 代表的著作に見られる教育の概念と学校図書館観：“New Education and School Library”以外の著作から

最初に、ランガナタンを簡単に紹介し、代表的な著作に見られる教育の概念と学校図書館観を整理する。

2.1. ランガナタン (Shiyali Ramamlita Ranganathan, 1892-1972)

インド・マドラス州（現タミルナドゥ州）出身の数学者・図書館学者である。1924年32歳の時にマドラス大学図書館長に就任後、図書館の経営、図書館学の研究に邁進した。主な著作に『図書館学の五法則 (The Five Laws of Library Science)』『コロソ分類法 (Colon Classification)』などがある。多数の著作を残すのみならず、マドラス図書館協会やインド図書館協会の設立と発展に寄与し、インドの図書館の発展に一生を捧げた。国際的にも評価が高く、「インド図書館運動の父」と呼ばれる。

成の観点で見ると」『教育思想』39号, 2012, pp.97-114.

2.2. ランガナタンの図書館観に見られる教育思想

2.2.1. 『図書館学の五法則』の巻頭言：マヌの言葉

「知識を無学な人びとの戸口まで運び、権利を理解するようにすべての人びとを教育すること。この奉仕の崇高さは、全地球を護ることさえも及び得るものではない。」⁴

ランガナタンの代表的著作である『図書館学の五法則』の巻頭言には、インドの神の一人であるこのマヌの言葉がある。「すべての人々を教育すること。」が崇高な奉仕であり、この大目標に向けて図書館は働かねばならない、ということを示している。

2.2.2. 図書館の基本的な原則

『図書館学の五法則』の結論とも言うべき次に紹介する節では、図書館が教育の一形態であることを示し、これはどのような図書館でも内なる原則として存在する事が示されている。

「図書館のあらゆる発展段階を通じて確保することに努めてきた図書館の基本的な原則 (the vital principle) —それは、あらゆる館種に共通するものであり、将来とも図書館の際だった特徴となることを主張するであろう原則—は、図書館は普通教育の手段であり、図書館は、あらゆる教育の道具を一堂に集め、無料で分配し、それらの助けで知識を普及するということである。あらゆる館種を通じて主張してきたこの基本的な原則—「図書館の精神」—は内なる人 (inner man) のようなものである。」⁵

第5法則「図書館は成長する有機体である」で示したように図書館は成長し変化していくものであるが、その内部には不増不変である原則、「図書館は教育の一形態」が確固として存在している、ということを示している。続けてヴァガヴァッドギータ (Bhagavad-Gita. Chap 2. Verses 22-4) の一節を引用している。

「人は使い古した着物を投げ捨て、他人の新しい着物を身につけるように、
体現化した精神は使い古した姿態を捨てて、他の新しい姿態に入りこんでいく。
剣は彼を切らず、火も彼を焼かず、水も彼を濡らさず、風も彼を乾かさない。
彼を切ることはできず、彼を焼くことはできず、また彼を濡らすことも乾か

⁴ S.R. Ranganathan, *The five laws of library science*, 2nd ed., Bombay: Asia Publishing House, c1963, p.9, 翻訳: S.R.ランガナタン著; 渡辺信一, 深井耀子, 渋田義行共訳『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981, p.9.

⁵ *ibid.*, p.354, 翻訳 p.331.

すこともできない。彼は不滅で、すべてに充満し、堅固であり、不動であり、永遠に変わらない。」

つまりこの話の「彼」は、「図書館の基本的な原則」の比喻であり、どのような状況でも変化をしないものの象徴として表されているのである。

2.3. 代表的著作における学校図書館観

次にランガナタンの代表的な著作から、今回検討する「学校図書館」について、触れられている箇所を概観する。これによってランガナタンの学校図書館への基本的思考を押さえる。

2.3.1. 『図書館の五法則』

「(学校図書館は)「学校の心臓」(the heart of the school)」⁶

「正しい読書習慣を形成するために学校図書館で最大限の機会を彼らに与えることが絶対に必要である。ご存知の通り、学校で読書を深く愛するようになった子どもは、その後も読書の習慣をもち続けることが多い。」⁷

2.3.2. 『レファレンスサービス (Reference Service)』

「手ほどき (initiation : 図書館を活用できるようになる手ほどき) に時間と労力を割くのに最も効果的なのは子どもの時期である。子ども時代に習慣は形成されるのである。これは言うまでも無いことである。本を利用するという事は、一つの習慣である。(中略) 同じように図書館を使うことも一つの習慣である。(中略) 実際に、図書館の利用法の手ほどきをするのに適正な場所は、学校図書館であるべきである。」⁸

以上から学校図書館は、学校の中心、いわば心臓の役目を果たすべきで、子ども時代の読書習慣の形成と図書館利用法の習得の場にすべきであるという考えがこれら代表的な著作から見られる。次章から “New Education and School Library” を頼りに、ランガナタンの教育観と学校図書館観をさらに詳しく紹介する。

⁶ *ibid.*, p.55, 翻訳 p.54.

⁷ *ibid.*, p.132, 翻訳 p.129.

⁸ S.R. Ranganathan, *Reference service*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1961, p.115.

3. “New Education and School Library”の概要

3.1. S.R.Ranganathan “New Education and School Library”について⁹

ランガナタンは、図書館長になる前、学校で数学の教鞭を執った経験があった。またマドラス大学図書館長に就任後、学校図書館についての講義を教育大学で持っていた。これらの長年の経験と研究に基づき、1942年にマドラス図書館協会（The Madras Library Association）から“School and College Libraries”を刊行した¹⁰。これを内容・タイトル共に大幅に改訂して、1973年に第2版として刊行したものが本書である。本書は、初版に比べるとタイトルに『New Education』とあるように、世界的に流行した新教育¹¹の教育思想を前面に打ち出している。

3.2. ランガナタンの著作の中における“New Education and School Libraries”について

本書は多作であるランガナタンの著作の中において、どのような位置を占めるかについて言及する。

まずは1942年に刊行された初版であるが、最初の著作である『図書館の五法則（The Five Laws of Library Science）』から数えて、10冊目の作品である。ページ数も432頁にわたる。代表的著作である『図書館の五法則』の第2版が449頁であることから、本書も大作と言えよう。1973年の第2版では、510頁と大幅に増えているため、更に大作となっている。

次に執筆された時期であるが初版が『レファレンスサービス（Reference

⁹ S.R. Ranganathan ; assisted by P. Jayarajan, *New education and school library*, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4) , Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, 510 p.

¹⁰ S.R. Ranganathan ; with a foreword by John Sargent, *School and college libraries*, (Madras Library Association. Publications series, 11) , The Madras Library Association , Edward Goldston, 1942, 432 p.

¹¹ 「広くは旧来の教育の克服を目ざす新しい教育の試みを意味するが、とくに19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米先進諸国を中心に世界的に広がった教育改革運動の全体をさす。(中略) 多様な理論と実践からなるが、およそ、「児童から」vom kinde ausという象徴的スローガンのもとに、旧来の教師中心の画一的、注入主義的教育を批判し、児童の生活、活動、興味を中心にした教育課程、教育方法を試みるという共通の性格をもっている。」

JapanKnowledge Lib.所収、日本大百科全書（ニッポニカ）三原芳一による

<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000122231>（参照 2014.11.23）

Service)』の初版¹²とほぼ同時期になっている。どちらの著作も改版における大幅なタイトルチェンジとアルファベットによる章立てへの再編集、そして内容の更新が行われている事が共通しているほか、同じ話題¹³を取り上げるなど共通点も多い。

彼の著作を、扱う題材によって分類し、その中で本作を位置づけると次の通りである。

3.2.1. 総論

図書館に関する総論としては、最も著名な作品である『図書館の五法則 (The Five Laws of Library Science)』が挙げられる。

3.2.2. 図書館諸業務に関するもの

『図書館管理法 (Library Administration)』、『図書館マニュアル (Library Manual)』、『参考調査業務 (Reference Service)』、『図書館選書法 (Library Book Selection)』などが挙げられる。

3.2.3. とくに資料整理 (分類・目録) に関するもの

著名な『コロン分類法 (Colon Classification)』をはじめ、『図書館分類学序説 (Prolegomena to Library Classification)』、『図書館目録 (Library Catalogue)』、『図書館分類の哲学 (Philosophy of Library Classification)』、『分類目録規則 (Classified Catalogue Code)』など複数冊がある。

3.2.4. 教育に関するもの

本書はここに分類される。竹内 (2010)¹⁴が指摘している様に、ランガナタンの思想、特に『図書館の五法則』の背景には教育の概念が背後に存在する。しかし、『図書館の五法則』中に、教育に対する解説は多いとは言えない。一方、その教育自体を掘り下げて論考している著作として、今回取り上げる本作を挙げることができる。ゆえにランガナタンの教育思想の全体を理解するために、本書の記述を頼りにすることは有益である。

¹² *Reference service and bibliography*, 1942→*Reference service*, 2nd. ed., 1961.

¹³ ラクダ理論 (Camel Theory) 等、どちらの図書にも示された話題がある。そのほか、本書 Part T.は、*Reference service*のエッセンスを伝える様な内容になっている。

¹⁴ S.R.ランガナタン著；竹内愨解説、『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010.4, 295 p.

また本書の他に教育に関するものとして、成人の社会教育に関する図書である『余暇のための教育 (Education for Leisure)』があり、本書と並んでランガタンの教育思想を検討する上で有益である。

3.2.5. その他

インド出身にして同じくイギリスに渡航し、その結果夭折した天才数学者である S. ラマヌジャン (Srinivasa Ramanujan, 1887-1920) の評伝『ラマヌジャン (Ramanujan : The Man and The Mathematician)』がある。

3.3. “New Education and School Library”の内容について

本書の概要は次の通りである。最初に新教育の立場から教育というものを考察し、その中で学校図書館が果たす役割を論じている (Part B-E)。続いて学校図書館に焦点を移し、学校図書館の構成要素の分析 (Part F-J) と学校図書館では何をすべきかについて (Part K-N) を検討している。当時のインドの困難な事情を検討し (Part P-R)、さらに進むと話は実際の図書館業務になり、具体的な業務について部署ごとの解説をして (Part S-Y) 終わる。

【内容】 Part A 序文

- Part B なぜ学校図書館なのか：アプローチの方法
- Part C なぜ学校図書館なのか：カリキュラムの視点で
- Part D なぜ学校図書館なのか：教育の視点で
- Part E なぜ学校図書館なのか：教育課程の視点で
- Part F 学校図書館とはなにか：図書館の構成要素
- Part G 学校図書館とはなにか：図書館資料の要素
- Part H 学校図書館とはなにか：人間の要素
- Part J 学校図書館とはなにか：図書館施設・仕物の要素
- Part K 学校図書館をいかに：学校図書館で行われること
- Part L 学校図書館をいかに：学校図書館での方法論
- Part M 学校図書館をいかに：学校図書館における生徒の課業
- Part N 学校図書館をいかに：達成度テスト
- Part P 現代の困難：大いに不足する図書
- Part Q 現代の困難：管理側の無気力
- Part R 現代の困難：教育界の不活性さ
- Part S 図書館の五法則
- Part T レファレンスサービス

- Part U 貸出業務
- Part V 分類業務
- Part W 目録業務
- Part X 保守業務
- Part Y その他の業務

ここからは、本書の内容を概説する。

3.4 この本の由来

3.4.1 Part A: 序文

この本はランガナタンが教員と図書館員であったことを通して得た経験を元にして書かれた本である。1917年から1923年にかけて彼はマドラス大学（University of Madras）等で数学や物理学を教えていた。彼はその時期、充実した図書館の持つ潜在力をよく理解したという。どのような潜在力かといえば、一つ目は生徒同士の自己教育に刺激を与える力、二つ目は生徒が自分のイメージ通りに、自分のペースで、自分の満足が行くように成長することを助ける力である。しかし学校の図書館は実際の利用に耐えないことが彼にとって不満であった。

1920年、彼がマンガロール政府大学（The Government College, Mangalore）からコインバトール政府大学（The Government College, Coimbatore）へ異動した際に、次の様な経験をしたという。

異動先には図書館が無く、彼は学長に基本書のリストを提出して、図書館のために買って欲しいと上申した。学長の返事は「図書を買う事は、浪費である！」であった。しかし相談の結果、しぶしぶ学長は彼の提案を認可し、ついに図書館に蔵書を揃えることができた。その年の終わり、彼がその大学を去る際に学長から、（学校の図書館を活用した）彼の教え子が非常に優秀な成績をおさめたことを聞かされた。学長は彼の異動を残念がったという。この話から分かるように、彼は教室での学びと図書館での学びをうまく統合して、生徒の理解を促進することに成功したのである。

その後1924年にランガナタンがマドラス大学図書館の図書館長になった際、サイダペット教育大学（Teachers' College, Saidapet）の学長から教員養成過程の学生に対する学校図書館の講座を引き受けて欲しいとの依頼があった。彼はこれを神から与えられた仕事として引き受けた。学校図書館を全ての教育課程の中心拠点にするよう発展させる、という新しい課題に、彼は、はかりしれない満足感を得たのである。

彼が講義を毎年繰り返す内に、一週間の内にどのクラスの生徒も最低でも1時間は学校図書館を使わせる時間を設定するという動きが管内の学校に出て来た。その結果1933年、教育長は義務教育の中に「図書館の時間 (Library Hour)」を設けるよう指示を出した。また彼の学校図書館の講義は、近隣の学校教員からの受講が相次ぎ、結局はマドラス大学の一講座になるまで発展する結果となった。

以上の経験や講義、そして演習を通して得たものが本書にまとめられているのである。

3.5. 学校図書館を考える上での教育について : Part B-E: なぜ学校図書館なのか

この部分は、新教育運動に影響を受けたランガナタンの教育観が論じられている箇所、それを背景にして学校図書館が何故必要なのかについてまとめられている。ここで語られる教育とは、学校図書館を舞台にしたものである。教育における学校図書館の位置づけについて、特に議論が深められる。

3.5.1 Part B アプローチの方法

最初の試論として、「なぜ、どの学校にも図書館がなくてはならないのか。」と「なぜ、どのクラスの時間割にも図書館の時間が提供されてなければならないのか。」という問いに答えるため、4つのアプローチから解明を目指す。この4つのアプローチとは、つまり「1.権威」「2.慣習」「3.模倣」「4.推論」のことである。各項目の具体的に立てた問いは次の通りである。

1. 生徒の学習の一部として図書館での作業を推奨するような、よく知られていて従わざるを得ない権威ある教育理論というものがあるのだろうか？
2. 時間の経過とともに、教室での生徒の学びは、学校図書館での生徒の作業と大きく関連し、補うものだ、という教育の慣習に発展していくことがあるのだろうか？
3. 生徒による学校図書館での作業というものは外国、特にいわゆる先進国や先進地域での流行しているものなのであるだろうか？もしその通りであるのであれば、我々（インド）にとってそれを真似る事は必要で有益なことなのではないだろうか。
4. 教育理論を考察することは、生徒による図書館での作業が、教室での学習に有効に必要な補助となりえることを指し示すだろうか？

まず1であるが、聖典や個人の権威というものを論じ、時代を下ると組織

の権威というものが重視されてきたことを述べている。この学校図書館と関連する権威とはまさに政府の教育行政担当者である。この権威者が学校図書館の重要性を意識して、その方向に導かない限り学校図書館の発展は進まないことを述べている。

次に2であるが、伝統や慣習についてである。ここでは過去2世紀にわたる教育上の伝統や慣習について一考されるが、以前は本や教科書自体の調達と供給がさらに難しかったため、学校図書館どころではなく、あまり学校図書館や図書館の時間の有用性について役に立つものはないとする。次に3であるが、イギリスやアメリカにおける学校図書館を見習うということについて検証をする。外国とインドとは異なる背景にあり、先進諸国の子どもは活発で、インドの子どもは大人しいから、模倣することは意味が無い、という意見もある。しかしランガナタンはそのようなことを主張する人々を、知識が不完全で不見識な人々として批判している。インドは古代から長い思索の歴史を持ち、イギリス統治の時代は不遇ではあったが、独立も果たして上昇傾向に入っている、もともと豊かでリーダーシップに長じており、沸き立っているインドにとって、先進諸国を見習う事はたしかに有益である。しかし、原因と結果から推論する方法 (a priori method) を取って学校図書館について自ら考えることも必要であるという結論に至る。

最終的には権威も慣習も決定的に参考になるものではなく、先進諸国を見習う事は有益であるが、そればかりに頼ると教育理論の考察から学校図書館を考察する機会を失ってしまうので、この機会に論理的な考察の必要があることを指摘し、本書でのアプローチの方針をこの「原因と結果から推論する方法」で行うことを表明して終わる。

3.5.2 Part C カリキュラムの視点で

続けて Part C から Part E まで、3部構成で教育学的な考察を行っている。この3部構成の概要だが、教育を考える切り口として次の三つの視点を定め、章立てに対応させている。

- 1.カリキュラムの視点
- 2.教育を受ける側の生徒の視点
- 3.教育課程の視点

順を追って具体的に説明する。

1.は、教育内容が詰め込みすぎになりがちな問題つまり、カリキュラムが過積載になる傾向を指摘している。科学の発展に比例して、年々教えなければならぬ内容は、増加することになる。科学の発展に対応し続けていると、

教育現場では授業時間不足となってしまう。つまりカリキュラムに教える内容を詰め込み過ぎ、やがて破たんするというものである。また、子どもの頃に教育した内容は、年齢を経るにつれ陳腐化してしまい、世界の発展変化についていくことができなくなる。学校に通っている間に、全ての知識を詰めこみ、社会生活をその蓄積で生きて行く、という考え、つまりラクダ理論 (Camel Theory)¹⁵は、現実的ではないのである。

この解消法として彼は、外部記憶媒体 (externalised memory) としての参考図書 (reference books) の活用を提唱する。人間、とりわけ子どもの記憶には限界があり、変化する世界の全てを教え、記憶させることは不可能である。そのため図書、特に参考図書を人間の内部記憶 (inner memory) に対して外部記憶媒体とみなし、これをそれぞれの場面で調べ活用することで、直面した課題を解決して行くことを推奨する。そのためにはこの外部記憶媒体である参考図書の利活用方法を教育の現場で教える必要があると説く。つまり人間の一生は、学校卒業後、自発的な自己学習に費やす時間が長いので、知識を教えるのではなく、学習のやり方、つまり知識の入手方法を教え、あとは自分でやることの実践を基軸に据えた教育を行うべきであるとしている。これはまさに、子どもが自主的に自分の興味関心に基づいて動的に学ぶという新教育の立場であり、この新教育の手法を導入するべきである、と主張している。

3.5.3 Part D 教育の視点で (教育を受ける側の生徒の視点)¹⁶

続いて、2. 教育を受ける側の生徒の視点、つまり、大人数の一斉授業は生徒一人一人の成長や興味関心を無視したものになりがちな問題について論じている。

民主主義の発展に伴い、一般教育が 19 世紀から進展した。これに伴い、ある時点から急激に教育というものは大人数を一斉に教育するという形になった。その時期に、年齢が同じなどの画一的な基準で学級という大集団を構成

¹⁵ 砂漠を横断する際に、ラクダに生活物資を全部積みこんで、行程中に消費して目的地に無事到達する、ということ、人間の成長と教育に例えた理論。

¹⁶ 初版本である *The school and college libraries* では、*The Educand* (被教育者) とあるが、本書では *From the Angle of Education* とある。これでは 3 番目に論じられる *From the Angle of the Process of Education* との差異が説明しにくくなるため、ここは初版を参考に被教育者の視点で内容をまとめた。また本書 p.35 にも初版のまま 2. *The Educand* とあることを付記しておく。

し、個体差を考慮しない教育を行う様になったと述べている。これにより多くの落ちこぼれを生み出し、能力がある子どもを飽きさせるという結果をもたらした。これは教諭が講義した内容を画一的にノートに取るだけ、そしてノートの内容を暗記させ試験をするだけ、という教授方法に大きな問題があるとす。学校を出た後、単に暗記させられた知識は、応用がきかず、陳腐化してしまうことから、無駄になることも多く、これは学校教育の失敗であるとしている。

これらを解決するために、彼はジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の『学校と社会 (School and Society)』にて解説される学校図書館像を紹介する。詳しくは後述するが、子ども達は学校の各種の実践の場にて得た知見・経験を、学校の中心にある学校図書館に集まって来て、そこで図書を読み、ディスカッションや教諭への質問によって、より学びを深めるというものである。また学校図書館にある図書などの資料群が、子どもの内面の核 (nuclear¹⁷ element) を刺激し、さらなる自己教育の発展を促すというものである。学校図書館はまさに成長の場となり、子どもの個性を抑圧することなく、自主的に自らの成長を生成させるような場となるとしている。また教授法とは大人数一斉教授ではなく、子どもの個性を基点とした、個別指導であるべきで、一人一人の問題関心を満たすような方法を取らねばならないとしている。

3.5.4 Part E 教育課程の視点で

3 部構成の最後にあたるこの節では、前節で述べた個人の自主的・自律的な成長・学びが教育課程の中心になるべきであるという主張がさらに展開される。この主張のために彼は、彼自身の経験や古今東西の著名人が残した教育論を紹介し、検証をしながら論を進めている。

人間の成長 (becoming) には大きく影響を与えるものが三つあるとしている。一つ目は生物学的影響、すなわち遺伝である。次に環境の影響である。これには物質、社会、心理の影響、そして学校の教師の影響がある。そして個性の影響、つまり魂の影響があるとしている。この三つに基づき人間は成

¹⁷ nuclear と同意。“nuclear”, *The Oxford English dictionary*, 2nd ed. prepared by J.A. Simpson and E.S.C. Weiner, Oxford University Press, 1989, v.10, p.576.には、“Pertaining to, having the form or position of, a nucleus.”とある。“nucleus”は、中心部、中心核という意味である。

長しているのだが、この課程はまさに人間の固有性 (inherence) を表出し完成させる課程であるとしている。

この考えを前提として彼は次の様な問いを立てる。

1. 生徒が学校を嫌わないようにするにはどうしたらよいか。
2. 興味を持つように教えるにはどうしたらよいか。
3. 生徒の最も得意とするものの創造性を抑圧しないためにはどのような方法があるか。
4. 人と協力しないで一人でやるという考えに囚われないようにするにはどのような方法があるか¹⁸。

これらの問いに対する解答が、受動的な学びを基本にすることを排し、生徒の能動的学習を中心に置く教育なのである。生徒各々が自分の興味関心に従い、自分のペースで実践的に学ぶことによって、これらは全て解決する。一方的な教授方法である伝達型教育ではなく、一人一人が試行錯誤し、能動的に学ぶ創造型教育を目指す必要がある。そのためには顔の違ひほどあまたある生徒一人一人の個性や得意分野に対応する蔵書を出来る限り多く、一人一人の問いに答えられるよう準備せねばならない。

加えて学ぶ内容は、個別の細かい知識を、互いの関連性の理解抜きにただ暗記をするのではなく、知識の全体は関連があり統合性があることを意識できる内容を教えるのでなければならないとしている。また、図書館の時間にグループでプロジェクト的に学ぶことが、お互いの得意不得意を補完し合い、個性の多様性をかえって魅力的なものにする。その中で生徒は社会性を養い、そのみならず皆が一緒に成長するという感覚をも養うことになる。

この節の最後に、リグヴェーダの一節を引用し、個体差はあるが協力して一緒に学び、ともに完全を目指すということが謳われる。

「集まって、一緒に話して正しく理解しよう。

一緒に祈り、一緒に達成しよう、統一とお互いの理解を。

意思をまとめ、気持ちを調和させよう。

それぞれの考えを出して、協力しよう。皆の中に完全な調和が生まれるように。」¹⁹

¹⁸ この箇所の直訳は「生徒の反社会的傾向 (anti-social tendencies) を育てないためには、どのようにすればよいか。」である。しかしこの節での“socialization”は、学校図書館でのグループ活動を通じた学びを訴える文脈の下にあるので、以上の様に意識した。

¹⁹ S.R. Ranganathan, *New education and school library*, p.107.

結論として、教育とは「外部記憶媒体の使い方を教えること」、「自分のペースで自らが学ぶこと」、「自主的に経験的に動的に、そして人と協力して学ぶこと」という3点に定義をまとめて終わる。この内容については後の章で更に詳しく扱う。

3.6. 教育における学校図書館の分析：Part F-J 学校図書館とは何か

3.6.1. Part F 図書館の構成要素

最初に図書館の歴史を概観し、“Library”という単語の意味がどのように変化してきたかの説明がなされる。それによると図書館は「本を書く場所」から始まり、そして「保管する保存庫」に転じた。第二次世界大戦後には、第三の機能、つまり「図書館の近隣住民を図書館の定期的利用者にし、本を読む人に変える (converting every person in its neighbourhood into a habitual library-goer and reader of books)」という機能があらわれた。

それに従い、学校図書館は子どもの頃から繰り返し読書習慣を身につけさせるようにしなければならない。教育現場でも、図書館を使いこなす能力と、図書館に行きたくなる気持ちを育まねばならない。このことは、学校時代のみならず一生継続様なものとして、植え付けるようにする。この機能を達成するために、教室での学習と学校図書館は密接な連携を実現する必要がある。以上をまとめると学校図書館の機能で重要なものは、一生継続読書と図書館利用の習慣を植え付け養わせる、というものである。

この新しい学校図書館の役割の進展は、次の3つの図書館の構成要素を同時に成長させることとなったとしている。この図書館の3つの構成要素とは、図書館資料の要素 (bibliographical constituent)、人間の要素 (human constituent)、そして図書館施設・什器の要素 (material constituent) である。

3.6.2. Part G 図書館資料の要素

まず学校図書館で扱う資料について種類と量を考察している。それによると種類は次の五種類になるという。

1. 参考図書 (reference books)
2. 様々な分野の解説書 (normal form of books expounding ideas in diverse fields)
3. 伝記や旅行といった情報源になる図書 (descriptive and informative books, such as biographies and travels)
4. 娯楽の図書 (recreative books)
5. 感動や靈感を与える図書 (精神世界、芸術、文学等) (inspirational books)

またその他の側面として、生徒の最近の話題に関する図書はもちろん、それを越えた資料も集めないとならないとしている。言いかえると生徒の関心を絶えず広げていくことができるように、学校図書館の図書は用意されねばならない、とある。

次に量であるが、予算の制限があるので、「カリキュラムに関係している」図書と「(カリキュラム外の)文化と科学に関する話題のもので、生徒の経験に関係するような」図書に絞って、「生徒の好奇心を満たし」、彼らの「なぜ」「何」「どのように」に答えることができるようなものを受入れなければならないとしている。また様々な知的レベルや言語能力の生徒が居るので、どの層の生徒にも対応できるようにすることが、大事なポイントとしている。

3.6.3. Part H 人間の要素

続けて学校図書館における人的要素として利用者である「生徒」「教諭」そして資料と生徒・教諭をつなぐ「学校図書館司書」という三要素に分けて解説している。この三要素は電磁石のコイルと電流と中心棒の関係に例えられ、どれが欠けても電磁石、つまり学校図書館は機能しないとしている。

生徒への魅力を失わないように、興味が持たれるような、新しく、そして新奇性のある資料を揃え、地域や国、世界等での出来事に合わせてそれらを展示することで、常に生徒が集まる学校図書館にする。そのために学校図書館側は生徒に親愛の気持ちで接し、正確で即時的なサービスをする必要がある。

生徒は教諭を真似する傾向があるので、教諭が学校図書館を重視すると生徒も図書館を大事にする気風が生まれる。教諭には選書の協力を依頼したり、授業で図書館を広報したりしてもらおう。そして授業での学校図書館の活用を促進してもらおう。教諭はきっと喜んで手伝ってくれるだろうと述べている。

最後に学校図書館司書である。学校図書館の仕事は数多くの業務をこなす独特で責任のある最上の仕事である。その地位には高い素質や学歴を持つものをつけ、高い待遇を保障せねばならない。新教育の概念により、学校図書館は学校の中心となり、そこに居る職員はただの資産管理人や守衛ではなく、学校で行われる教育を補完し、真の価値を持つものにして、完成させる役目があるのである。

3.6.4. Part J 図書館施設・仕器の要素

学校図書館の施設や仕器について解説される節である。閲覧室と書庫の詳細や開架式の書棚を採用すること、そして図書室の美観を保つための家具や

絵画、換気、採光などについて説明されている。

3.7. 学校図書館のなすべきこと：Part K-N 学校図書館をいかに

3.7.1. Part K 学校図書館で行われること

ここでは、学校図書館を実際どのように運営するか、そしてどのように教育に関連づけるか、という観点で解説がなされている。

まず図書館の利用習慣をどのように生徒へ植え付けるかが説明される。まずは生徒が学校図書館に親しむ必要がある。本を大事にすること、辞書の使い方、開架式、分類、目録、ノートの取り方、書誌、これらについて教えること、それを通して図書館に親しむことができるようにする。そのほか、図書館における公共心の育成や生徒側から見た学校図書館の目的などが言及される。

3.7.2. Part L 学校図書館での方法論

学校図書館での教育について、次の活動を具体的な方法として挙げている。それは授業準備での学校図書館の利用、パラレルリーディング、学校図書館による補習、学校の外の情報を与えることによる刺激、読み聞かせ、事項調査、情報や娯楽を与えるための読書、感動や靈感を与える図書の紹介、図書館を使う習慣を身につけさせること、といったものが列挙されている。

3.7.3. Part M 学校図書館における生徒の課業

生徒の活動についての紹介は、読書日記をつける話が興味深い。人間の記憶は怪しいので、生徒の内から読書の記録として読書日記をつけることを彼は勧めている。彼によると読書日記は次の三つに分けて取るべきだ、としている。

1. 事実発見や調査の読書日記 (fact finding diary)
2. 娯楽本の読書日記 (diary for recreative books)
3. 感動した語句の日記 (diary for inspirational passages)

学校図書館司書が、これらのノートを精査し(評価の視点も示されている。)、フォローアップすることで生徒の能力はさらに上がるとしている。そのほかグループワークでの課題遂行や、図書館の利用についての理解度テストの実施なども挙げられている。そして定期的に読書エッセイや論文、文集を作成させることで、生徒の読書理解がさらに深まると述べている。

3.8 当時のインドを見ると：Part P-R 現代の困難

ここでは当時のインドでの教育と学校図書館の諸問題が報告されている。とくに図書不足、管理側の無気力、教育界の不活性さが訴えられる。

3.8.1. Part P 大いに不足する図書

当時のインドでは、英語を解する子どもが少なかった。それに対してインド諸語による子ども用の図書は、必要であるにもかかわらず不足していた。当時のインドの出版業界であるが、生徒用の図書は教科書の生産に特化されていて、幅広い範囲の図書の供給体制がまだ確立されていなかった。特に児童書²⁰の不足、それもインド諸語で書かれたものの不足が深刻であると訴えている。これに対して各地域の教員組合が、所属している教諭に一人あたり最低一冊、本人の専門に関する本を作成させて刊行すれば、資料不足は解消するとしている。

3.8.2. Part Q 管理側の無気力

次に学校図書館の運営上の困難である。学校図書館司書の雇用について、その養成は 30 近い大学が行う様になったものの、雇用待遇が相変わらず悪いままであるので、これを改善せねばならないとしている。建物についても学校図書館の概念が従来型の学校建築には無いために、「新教育」の概念を元にする、学校図書館を中心に配置した学校建築を行わねばならないとする。

3.8.3. Part R 教育界の不活性さ

最後に教育界の不活性さを指摘している。ここで彼は政府、管理者側の役割としての更新講習（refresher course）の実施を取り上げて、従来にはなかった学校図書館の概念を現職教諭へ新たに教えねばならない、としている。また教員組合にて、学校図書館を活用した教授方法や、教諭・学校図書館・学校図書館司書の連携モデルを示す必要性を指摘している。そしてこの方法が、教育界の不活性さを打破する解決法にもなりうるとしている。その例として英米では図書館協会にて学校図書館部会が存在し、以上の問題や学校図書館の活用方法を教育大学で教授することを検討していることが示される。また教員組合やその機関誌などで常に学校図書館に関する事を欠かさず記事で話

²⁰ 児童書は、一般図書とも教科書とも異なる独特の存在であり、他の図書とは別に生産供給体制を構築する必要をも指摘している。

題にすることが、同じく不活性さを打破するとしている。

3.9 図書館の諸業務: Part S-Y

この章は、学校図書館での各種業務について、仕事の流れや方法、考え方をまとめたマニュアル的な部分である。最初に図書館サービスの根幹である「図書館の五法則」と「レファレンスサービス」の解説があり、それ以降は具体的な業務の解説になる。

3.9.1. Part S 図書館学の五法則

図1は、彼の生み出した「図書館学の五法則」について、学校図書館業務での位置づけを図示したものである。それによると「五法則」は、基盤の岩から仏塔（の如きもの）を支える地中の五本柱となっている。その仏塔は図書館サービスを表わし、「図書の選書・発注」「雑誌業務」「図書館維持業務」「分類業務」「目録業務」「レファレンスサービス」の6段を経て「貸出業務」に到る計7段の塔として示される。

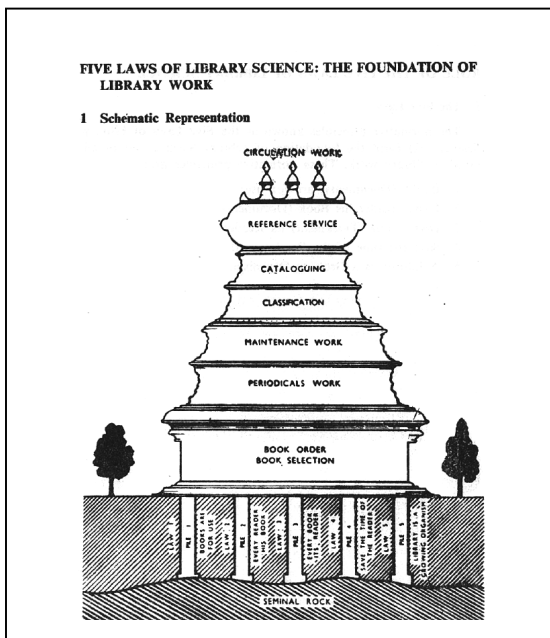


図1 五法則と図書館諸業務の構造

3.9.2. Part T レファレンスサービス

ここでは、学校図書館でのレファレンスサービス（日本語では参考調査業務）が解説されている。彼によると、図書館サービスの最終目的は「図書館の五法則」を満たすことであり、レファレンスサービスは、この目標達成のために重要な役割を果たすという。その役割とは読者と本とを個人的なサービスによって適切に結びつけることである。このサービスの機会は全ての人に均等であり、出自は問わないことも示している。学校図書館におけるレファレンスサービスには、生徒に図書館の利活用方法を手ほどきすること、生徒個人に対するサービス、学級へのサービス、の三つがあるとする。

生徒への手ほどきとは、図書館業務研修を受講させるように、情報探索の仕方を教えて体得させるものである、という。次に生徒個人に対するレファレンスサービスとして、即時的に回答できるものと、時間をかけて調査し回答するものの二種類を紹介している。最後に学級へのサービスについて、特に要求があった話題について回答と資料を準備するとある。

この節の最後では、学校図書館におけるレファレンスサービスのマニュアル的な解説から一步踏み出して、レファレンスサービスの社会での役割を論じ、人的資源の育成と精神形成の話題を扱っている。それによるとレファレンスサービスが人的資源の開発を、読書と人間形成において重要な働きを担う事で果たすとしている。特に精神の耕作（cultivation of mind）という観点で、読書が人間の精神の成長の糧になること、それをレファレンスサービスが側面支援することが論じられる。これについてはまた後に詳述する。そしてこの節の最後には図書館の諸業務の中でレファレンスサービスこそ中心にある重要な業務であることが図によって示される。

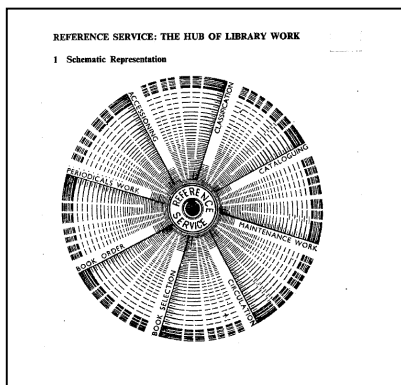


図2 レファレンスサービスとその他の図書館諸業務の構造

3.9.3. Part U-Y 図書館業務

学校図書館での各種業務について、さらに具体的な解説をしているマニュアル的な部分である。Part U 貸出業務では貸出規則やその運用方法、そして当時の貸出方式である、カード式の方法、そして開架式の利点などが示される。続く Part V 分類業務については世界的に主流である十進分類 (Decimal Classification) と彼が考案したコロソ分類法 (Colon Classification) について詳しく比較検討した後、コロソ分類法の分類の手法と分類表を示している。続けて Part W 目録業務では、目録の形状や種類など一般的な事を示すほか、記述法も解説している。続いて Part X 保守業務では、常に図書を請求記号の順番に並べて、必要な図書を発見できるようにしておくことについて紙幅を割いている。例えば返却された図書を書棚に戻す際のことや、新しく図書が増えた時、破損図書が出た時などを例として挙げている。そのほか雑誌を定期的に製本することも解説している。そのほか、Part Y その他の業務で、選書業務や発注業務、雑誌業務や受入業務、そして財務会計業務を扱い、本書は終了を迎える。

4. 本書に見られるランガナタンの教育の概念と学校図書館観

以上 “New Education and School Library” の内容を概観した。本書からランガナタンの教育観と学校図書館観が顕著に出ている箇所を紹介する。

4.1. ランガナタンの考える教育

彼は本書の中でこの様に述べている。

「(教育の目的は) 共同体の各人が自らの得意分野の創造的能力を解放し、自らの手法でその力を発揮するようにすること」²¹

彼はこのように人間一人一人が持つ個性や特性に重きを置いて、その能力を発展させ本人の潜在力を覚醒させてその力で人類社会をさらに発展させる、と考えている。特筆すべきは、共同体における個人の固有能力の発揮を重視している点である。

またこの様にも述べている。

「(教育とは、) (予測のできない) 未来の未知の問題に対して、よくても一般

²¹ S.R. Ranganathan, *New education and school library*, p.35.

的で柔軟に対応する能力の訓練をすることくらいしかできない」²²

「新しい（教育の）見方によると、正規の学校教育で行われる教育の内容は、次から次へと刊行される図書資料の助けによる、一生涯続く自己教育の方法を生徒に教える事が中心になるべきである。」²³

これは具体的に言うと、内部知識を鍛えるだけではなく、参考図書という「外部記憶媒体」の使い方を覚え、これら図書の利用を習慣化し、どこに必要な知識があるかを体得することである。科学発展と世界の変化に従って、覚えなくてはならないことが刻一刻と累積していく中、解決手段や答えの発見をこの技能が可能にするのである。

学校教育のカリキュラムは、時代が下れば下るほど教えねばならない知識、技術が多くなり、過積載、つまりいわゆる詰め込み教育になりがちとなる。この考え方は爆発する知識と情報に対する対処法として提示されている。

以上の考えをまとめ、学校図書館を使うという観点で教育を次の様に定義している。

「教育とは、

1. 記憶トレーニングではなく、学校図書館の活用による、外部記憶装置の使い方トレーニングであること
2. 同じスピードで、同じことや情報を学ぶような大人数の一斉授業ではなく、学校図書館の活用による、個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人指導学習であること
3. 受動的に、抑圧的に、孤独に、部分的な内容を学ぶのではなく、学校図書館の活用により、活動的に、実験的に、創造的に、そしてグループ学習的に広い分野を学ぶものである。」²⁴

この様に彼の教育観は、図書館を場所とする自己教育という考えと、動的にして人と一緒に協力して学ぶという考えの両方が中心にある。

4.2. ジョン・デューイの『学校と社会（The School and Society）』からの影響

1950年にランガナタンとジョン・デューイは会見した。ランガナタンはデューイの著作をよく学んでおり、デューイに会うことを熱望していた。1950年に渡米し8ヶ月滞在した際、それがようやく叶った。

²² *ibid.*, p.43.

²³ *ibid.*, p.46.

²⁴ *ibid.*, p.108.

実際の会見では、ランガナタンの著作“School and College Libraries”²⁵を読み、新教育のインドでの広がり満足している、という話をデューイ自身からされた。しかしランガナタンは、この図書に書かれていることはほんの自分の希望であり、現実のインドとは違う、と謙遜した。しかしそれでもデューイはこの図書の価値を評価すると彼に言ったという。この逸話とともに本書では、デューイの『学校と社会』で述べられている「図書館が中心にある学校」モデルを紹介している。

『学校と社会』における学校図書館の説明は、次の通りである。

「中央は、すべてが図書室に、すなわち、実践的作業に伴う問題の解明に役立つ、その作業に意味と教養的価値を与えるために収集されたあらゆる種類の知的資料に、集まってくる様子を示している。もしこの図の四隅が実践というものを象徴しているとすれば、その内部の中央部は、この実践的活動の理論というものを象徴しているのである。(中略)

(図書室は)それは、子どもたちが、経験したことや問題や疑問や自分たちが見つけた具体的な事実やらをもちこんでくる場所であり、また、それについて議論がなされ、その結果、それらに対して、新しい光が、とりわけ、他の人々の経験、積み上げられた世界中の知恵—図書室に象徴されているものであるが—というものからの新しい光が投げかけられる場所なのである。」²⁶

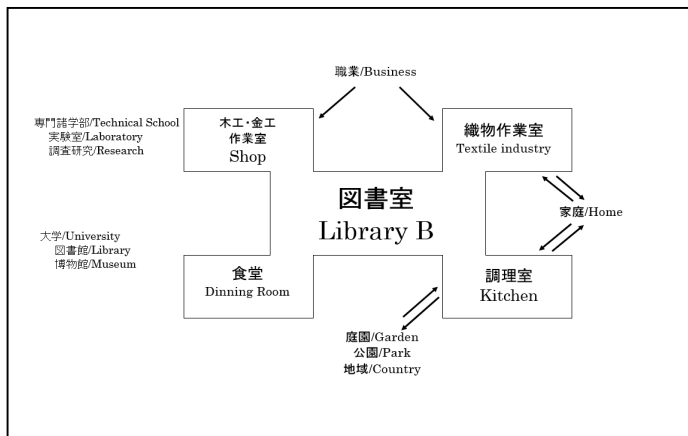


図3 学校の中心にある図書館²⁷

²⁵ S.R. Ranganathan, *School and college libraries*, 1942, 432 p.

²⁶ ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』, 明治図書, 1985, pp.112-116.

²⁷ John Dewey, *School and Society*, *John Dewey, The middle works, v.1: 1899-1924*, Southern

本書では当図とその解説に一節を割き、デューイの学校図書館観と教育観とを紹介している。ここではデューイの主張に従い、生徒の教育の場として学校図書館が学校の中心にあり、そこでの自己教育は、四方にある教室での学び、そして学校の外部がもたらす生徒の経験と統合されるべきであるとしている。ランガナタンは、以上の点でデューイの教育観や学校図書館観に大きく影響を受けている。

4.3. ランガナタンの考える学校図書館

次にランガナタンの考える学校図書館観を整理する。ここでは彼の「学校図書館とは」、「学校図書館の機能」、「学校図書館の構成要素」をそれぞれ(表1)(表2)(表3)にまとめた。

学校図書館とは ²⁸	外部記憶装置の使い方、つまり参考図書の利用方法をトレーニングする場所
	個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人学習の場であり、個人的な指導を受けることができる場所
	蔵書によって活動的に実験的に創造的に(ある特定の分野に特化するのではなく)広い分野を学ぶ場所であり、またグループ学習的に学ぶ場所

表1 ランガナタンの考える学校図書館

学校図書館の機能 ²⁹	生徒を読者(本を読む人)に変える。 生徒に読書の習慣、そして図書館を利用する習慣をつけさせる。
------------------------	--

表2 ランガナタンの考える学校図書館の機能

Illinois University Press, 1976, p.49, 456 p. 邦訳:ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』, 1985, p.112, 219 p.

²⁸ S.R. Ranganathan, *New education and school library*, p.108. の教育の定義を、学校図書館の性格の面から筆者が再編しまとめた。

²⁹ *ibid.*, p.115.

学校図書館 の構成要素 ³⁰	図書館資料	参考図書 様々な分野の解説書 伝記や旅行といった情報源になる図書 娯楽の図書 感動や靈感を与える図書（精神世界、芸術、 文学等）
	人間	生徒 教諭 学校図書館司書
	図書館施設 と什器	書庫 開架式閲覧室 グループ学習室 カウンター (ほか窓・通路・空調・美観等の説明あり)

表 3 ランガナタンの考える学校図書館の構成要素

4.4.インド的な精神思想に裏付けられた人間形成思想

ランガナタンの著作は、インド思想やインドの逸話を元に論じる話が多く出ており、欧米とは異なる独特な図書館観を生み出している印象を与える。これは Roe (2010) ³¹によるとインドで図書館という新しい概念を植え付けるために、インドの人々に分かりやすくするためであったという。とりわけここではヴェーダ哲学に基づき、図書による精神の耕作を説明した個所について紹介する³²。

これはレファレンスサービスの社会的な役割について解説した個所 (Part TJ,TK) に登場する。ランガナタンによると物質的な豊かさを生み出すために、人の資質の耕作 (cultivation of human resources) つまり人的資源の充実がまず必要である。ではその人的資源の充実は何によって生み出されるかにつ

³⁰ ibid., pp.116-168.

³¹ George Roe, Challenging the Control of Knowledge in Colonial India: Political Ideas in the Work of S.R.Ranganathan. *Library & information history*, v.26(1), 2010.3, pp.18-32.

³² S.R. Ranganathan, *New education and school library*, pp.305-324.

いてだが、これはヴェーダの「人 (man) とは精神 (mind)」という語句に基づき、人の精神の耕作 (cultivation of mind) によるものである、としている。この精神とは次の五要素によって構成される。

精神	記憶 (memory)
	感情 (emotion)
	吸収する知力 (absorbing intellect)
	創造する知力 (creative intellect)
	昇華した感情 (sublimated emotion)

表 4 精神の五要素

図書の種類とこの五要素を対比させると次の様になるとする。

記憶	外部記憶装置である参考図書
感情	娯楽図書 例：伝記、フィクション、旅行
吸収する知力	通常の図書 普通の読者に必要なもの
創造する知力	論文や専門書、学術雑誌 専門家が必要とするもの
昇華した感情	独創的で影響力が大きい図書 (seminal books)、文学や宗教

表 5 精神の五要素に対応する図書の種類

これらの図書を、図書館は肥料の様に人々の精神に与え、精神、そして人の資質の成長を促す。その際、レファレンスサービスが人と図書を適切に結びつけることで、この働きを果たすという。その様子が次の図である。

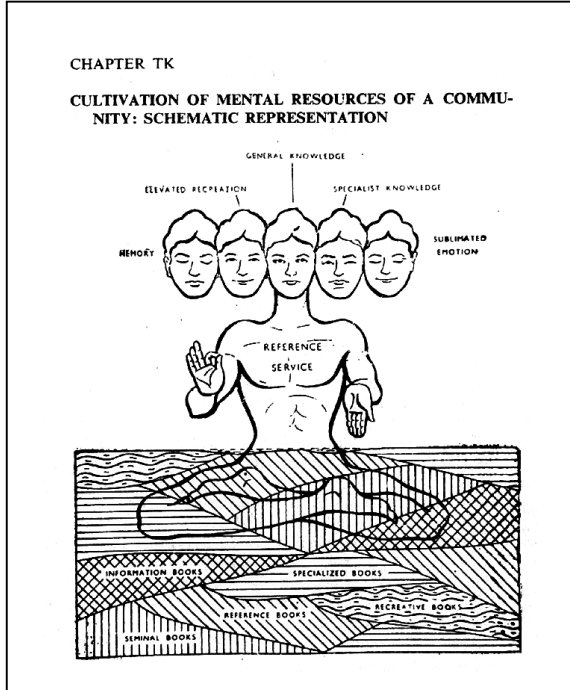


図 4 精神の耕作 概念図

当図を読み解くと、結跏趺坐し印を結んでいる人物は、精神の耕作を行う様を植物に似せて現している。大地から肥料として養分を吸い上げ、葉に見たてた頭部を育成するのである。地中深くには様々な本の地層（情動的な図書、専門書、参考図書、娯楽図書、独創的で影響力が大きい図書）が示されている。結跏は根のようにこれらの智慧を吸い上げ、胴体にあるレファレンスサービスがこの流れを整理し、対応した精神のもとに適切な養分を導く。頭部には五種の精神要素（記憶、感情、吸収する知力、創造する知力、昇華した感情）³³を示す五面があり、吸い上げられた智慧の力で葉の様に繁茂するというものである。

³³ 表 4 の五要素と図 4 の五面は、異なる用語があるものの、対応していると考えられる。感情(emotion)→左から 2 番目の面(elevated perception)、吸収する知力(absorbing intellect)→中央の面(general knowledge)、創造する知力(creative intellect)→右から 2 番目の面(specialist knowledge)

またランガナタンはこのレファレンスサービスによる精神の耕作を子どものうちに、それも早く開始すればするほど良い、と述べており、学校図書館のレファレンスサービスが導く精神育成の重要性を提唱している。

5. 考察

5.1 自発的な学修の場としての学校図書館

ランガナタンの考えでは、生徒は自分のペースで自発的な学修を行い、自らの興味関心に基づいて楽しみながら動的に学習することを重視しており、学校図書館をその場として位置づけていることを述べた。これは今まさに進んでいる高等教育のアクティブ・ラーニングの議論によく似ている。

「平成 24 年 8 月の中央教育審議会の答申においては、学士課程教育の能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要とされ、生徒には、主体的な学修に要する総学修時間の確保、教員には、教員と生徒あるいは生徒同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫などが求められている。」
学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）【概要】³⁴
（平成 25 年 8 月科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会）

しかしこの立場は、1899 年にデューイが示したもの、そして 20 世紀初期に興隆したいわゆる「新教育」の立場と大きな違いがない。それでは何故、21 世紀にある今、このような揺り戻しがあるのか。

5.2 我が国における戦後教育の動きと学校図書館

我が国では戦後、アメリカ型の生活経験教育が導入された。その後、知識低下が叫ばれ、「知識重視」教育になる。その後、科学技術の急速な発展による「教育の現代化」によって、授業時間数は極大となる。しかし高度経済成長が終わり低成長に転化すると、今度は知識よりも様々な問題を主体的に解決する能力の養成が重視され、授業数と教育内容の減少がはじまる。そしていわゆる「ゆとり教育」でその傾向は極められる。その後、「ゆとり世代」の学力低下が叫ばれ、また時代は教育に知識教育を求めるようになりつつある³⁵。この教育目的の変化を志水（2005）は「戦後教育の振り子」として、次

³⁴ 文部科学省「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）【概要】」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338888_1.pdf（参照 2013.9.4.）

³⁵ 当該箇所は、次を参考とした。

の図のように図示している。

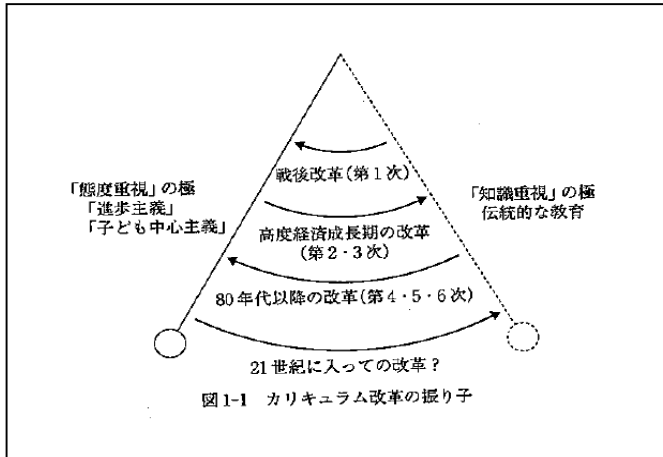


図 5 戦後教育の振り子³⁶

ここから考えると、生活経験を重視し自ら主体的な学びを促す背景では、学校図書館の意義は重みを増す。なぜならデューイが示したように学校図書館が、主体的な学習の場所となり、中心部分の役目を担うからである。しかし、科学発展に即した膨大な知識を学ぶことを尊重する背景では、学校図書館の意義は薄れる。なぜなら教室での一方的な知識伝達教育が重視され、ここに厳しい競争である高等学校受験・大学受験が絡むと、受験科目の知識の効率的な理解と記憶が教育現場の最大目標となり、学校図書館を拠点とした自発的な学習は必要性を失い、排除されるからである。その場合、学校図書館の意義は非常に薄れ、ただの自習室や古い使えなくなった図書の保管庫的な役割しか果たせない。

以上をまとめると、この振り子が左に振れると学校図書館を充実させるような動きとなり、結果的に栄えることになる。しかし右に振れると廃れるの

笠間賢二「高度経済成長期の学校教育」、宮城教育大学附属図書館特別展示企画『歴史のなかの教科書～高度経済成長期の教育～』記念講演会、平成 25 年 8 月 8 日。
水原克敏著『学習指導要領は国民形成の設計書：その能力観と人間像の歴史の変遷』、東北大学出版会、2010.6。

³⁶ 志水宏吉著『学力を育てる』（岩波新書 978）、岩波書店、2005.11、p.30。

である。日本の現状を考える³⁷に、右に振れていた時代がいかに長かったか、ということの間接的に示してくれる結果となる。

5.3. ランガナタンの教育観と学校図書館観の今日的意義

最後に今日的意義を考える。

1899年にデューイが発表した『学校と社会』の中で表明された「学校図書館は学校の心臓」という考え、そして20世紀初頭に流行した、生徒の経験を重視した自律的学習を主張する「新教育」、そしてこれらの考えを背景にした学校図書館と教育を論じた本書が発表された1973年、どれもが21世紀初頭にある現代から時間を経ている。一方我が国に目をやると、カリキュラムの過積載を解消するための、調べ方を教える教育、生徒一人一人の個性と可能性を発現させる個別教育、学校図書館を場所にした自立的でグループを主体とした学習、といったランガナタンの述べる3つの教育の定義が成就したとは言い難い。彼が否定した、知識の記憶トレーニングは相変わらず受験を主目標とした教育現場に親和性があり、未だに強く教育を支配している。一斉教授法も、少子化が進んだことで、ベビーブーム時代の様な大人数の教授指導を行うことからは改善したが、生徒の個性差を考慮した個別指導学習という理想像からは未だに乖離している。少子化による生徒数の減少のため、教諭一人当たりが受け持つ指導生徒も減少したものの、財政の悪化と共に、教諭の定員も減少傾向で、未だに少人数教育は成就しない。そして学級での教授方法も、従来のまま教諭の講義を一方的に受動的にノートに筆記するものである。また、受験というものが個人的な結果主義という性格であるため、これに向けた孤独な学習活動が主流のままである。グループを主体とし、各生徒の特性を生かしたチームによる学びは、受験と親和性がないので、主流になりきれていない。

ランガナタンの教育観と学校図書館観から、これら現代の未解決の課題が浮き彫りになる。「学校図書館は、教育を推論と結果から検討することで、その存在意義が浮かび上がる。」というランガナタンの主張は、現代の教育現場の問題点をはかる指標となりうるものではないか。

³⁷ わが国の学校図書館・図書室の利用者数、蔵書数、設備状況、そして職員配置の現状を鑑みると、決して先進的な国とは言えないことが分かる。統計調査的なデータは、全国SLA研究調査部、「2013年度学校図書館調査報告」、『学校図書館』,通巻第757号,2013.11,pp.41-61.などを参照した。

終わりに私的な感想であるが、新教育運動、そしてデューイ、そしてランガナタンの主張の通り、学校図書館が学校の中央にあり心臓の働きをするのであれば、初等教育から高等教育まで、心臓が無い学校は未だに多いことを主張したい。本当に学校図書館が学校の中心にあり、それを心臓と称するのであれば、そこには学校で一番の識者にして一番重要な人物が座っていることになるのではないかと。学校の構成員は、中心に集まってきて、そこで一番の知恵者に教えを請うたり、相談したり、手がかりを示唆されたり、解決に有益な資料を提供されたりするのである。しかし日本の学校で、中心に学校図書館があり、校長あるいは、一番の教諭がそこに座っているという事例はわずかな例に留まるのではないかと。現在、文部科学省が進めているアクティブ・ラーニングの高等教育への導入が、初等中等教育に良い影響を与え、従来の学校図書館観が変革されていくことを願うものである。

6. おわりに

最後に残した課題を書く。本稿はランガナタンの学校図書館観を確認し、それを手がかりに彼の教育観を紹介した。その過程で教育と学校図書館の理想像のようなものをまとめ、現代日本の現状と比較し考察した。しかし、今回手がかりにした“New Education and School Library”について、School Information Center や School Media Center を発展させてきた米国の思想との差異や位置づけを検証することができなかった。今後、学校図書館を継続して考える際に解決を目指したい。

本稿を書くにあたって次の皆さんにお世話になりました。御礼申し上げます。

中央大学附属中高図書館 荒井寿恵様、東北大学大学院教育情報学研究部 泉山靖人様、宮城教育大学附属図書館館長 遠藤仁様、宮城教育大学学校教育講座 笠間賢二様、筑波大学附属図書館副館長 加藤信哉様、埼玉県立春日部女子高等学校図書室 木下通子様、秋田大学 小池孝範様、図書館情報大学名誉教授・元日本図書館協会理事長 竹内愠様、東京学芸大学附属小金井小学校図書室 中山美由紀様、東北大学附属図書館 村上康子様（以上、姓の五十音順）